



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集 日本の黒を語る

vol. **46** | 季刊 冬
2018





【特集】

日本の黒を語る

漆黒、濡羽色、艶やかな黒髪…。

ある時は美しさの極みとして、またある時は、悲しみや恐れをもたらす色として、私たちの暮らしの中にある「黒」という色。あらためて見つめ直すと、その奥深さが見えてきます。企画展「天然黒ぐろー鉄と炭素のものがたり」へと誘う日本の黒について語っていただきました。

上 窯から引き出されたばかりの黒茶碗
下 漆 髹漆
刷毛で漆を塗り重ねながら黒くしていく。
写真：木村羊一

INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

01 【特集】日本の黒を語る

日本人と黒……………阪井芳貴

黒をつくる……………岩泉 慧

LIVE SCHEDULE

これからの催し

06 企画展「天然黒ぐろー鉄と炭素のものがたり」
Natural Black—A Tale of Iron and Carbon

LIVE REPORT

開催報告

07 陶と灯の日
光るどろだんご全国大会10回記念企画
ワークショップ「どろだんご研究所」

08 光るどろだんご全国大会2017

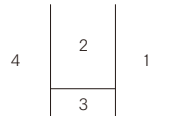
09 フィンランドからサンタクロースがやってくる！
窯のある広場・資料館 保全工事レポート 3

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol. 46 季刊 冬
2018

〈表紙写真〉



- 1「陶と灯の日」に、オレンジ色に輝く手づくりの陶製シェード (07P参照)
- 2 コバルトブルーのタイルが暖炉を飾る「世界のタイル博物館」オランダの部屋
- 3 陶楽工房を出て窯のある広場に向かう道。冬の影が落ちる。
- 4 企画展「土」見本帖」で展示された大きな光るどろだんごに大喜び。



ライブミュージアムに吹く風 3



ささやかだけれど、伝えたいこと

昨年5月にライブミュージアムに異動してから、あっと言う間に1年半が過ぎました。タイルの5千年にわたる歴史、生まれ育った常滑のものづくりの歴史、6つのミュージアム施設設立の物語など、日々新しい発見があります。ミュージアムの庭に出ると、散策を楽しめるように心を込めて植えられた四季折々の植栽の美しさ、可憐さにホッとします。ふとした瞬間に感じるような、「ささやかだけれど、伝えたい素敵なこと」をひとつでも多く、公式ホームページやFacebookなどを通じて皆さんに届けたいと思っています。Facebookでは、「LIXIL文化活動」として公式アカウント登録をしており、INAXライブミュージアムだけでなく、東京・大阪のギャラリィ、LIXIL出版の書籍、ブックフェア情報などが発信されています。さまざまなLIXIL文化活動を皆さんに知っていただき、興味を持っていただけるように、情報発信を心がけていきます。

竹内 綾

闇を象徴する黒

白は何色にも染まり、黒は何色にも染まらない究極の色です。その語源は「暗い」から来ているという説があります。

民俗学には「黒不浄」という言葉があり、人の死にかかわる穢れを指します。喪服が黒というのもそこにつながっています。日本人の穢れ観の根底にあるのは、古事記にあるイザナミ、イザナギの国生みの物語です。火の神を生んだイザナミが火傷を負って黄泉の国へ行く。イザナギは呼び戻しに行きますが、もう地上には戻れない。黄泉の国は、「常夜」とも、「常世」ともいう永遠に続く暗闇の世界です。日本の祭りは、基本的に闇の中で行われるものです。なぜなら黄昏時を境に、夜が神々の時間だからです。普段は明確に分かれている神と人の時間が、祭りの時だけコミュニケーションをとることができる。だから闇の中で神を迎え、もてなし、一緒に踊る。それが祭りなのです。日本人は「闇」を意識し、それを「黒」に象徴させたのではないのでしょうか。それは善とか悪ではなく、神聖な色なのだと思います。

文学や歌舞伎に登場するのは

清少納言は枕草子の中で、たびたび黒に触れています。お歯黒がよく付くのは

千年近く日本人の中にあるのでしよう。人形浄瑠璃や歌舞伎に登場するのは「黒子」です。顔も体も黒い布で覆って全身黒で、見えているけれどいないことになっていて、つまり、存在をなくすために黒が使われています。歌舞伎では人が殺される場面などに、殺された人を舞台から隠すために使われる幕があります。これが「黒幕」。ここから、物事を裏で操作する人を黒幕と呼ぶようになった。黒はとも目立つ反面、見えているものを見えないことにする色でもあるわけです。

黒い墨が表現するもの

日本の黒と言えば、墨があります。墨は黒ですが、濃淡によって表現の幅が大きく広がります。

たとえば古今和歌集の歌を別の紙に写す時に、平安の人々は料紙を選ばず。色紙だったり、金を散りばめたものだったり。細やかに手を施した紙を選んでそこに墨で文字を書く。それは明らかに料紙と墨の色の対比の美しさを狙っている。黒を使った美意識の最初のものではないかという気がします。源氏物語絵巻

- 1『源氏物語絵巻』東屋一 絵
- 2『源氏物語絵巻』東屋(一) 詞1・2(部分) 徳川美術館所蔵

日本人と黒

阪井芳貴
Sakai Yoshiki

名古屋大学大学院人間文化研究科教授

Profile
さかい よしき

1957年東京生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科で国文学を専攻。折口信夫の学問に触れ、沖縄をフィールドに民俗・芸能・文学を学んでいる。美ら島沖縄大使



徳川美術館所蔵 ©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom 2

徳川美術館所蔵 ©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom 1

「こころゆくもの。」お歯黒は女性の美の象徴であり、それがきれいに付くのはうれしいと。馬の色は「いみじく黒がいい。」空に黒い雲が出ると「黒き雲あはれなり。」「あはれなり」は、しみじみとしているという意味ですから否定的ではないですね。清少納言は物事を細かく見て、そこに評価を与えるのが得意な人だと思います。黒に対して、わりといい評価をしています。

万葉集では「ぬばたまの」という枕詞を持つ歌が80首あり、そのほとんどは夜や闇を示すのですが、それ以外で多いのは、女性の黒髪を指すときです。黒髪は女性の美しさの条件だという価値観が二つあります。

谷崎潤一郎は『陰翳礼讃』で、日本文化の根底にあるのは光と影だと説きました。漆の美しさはおぼろげな光の中で引き立つという趣旨のことも書かれています。闇の中にある行燈の光、墨の濃淡にも通じるおぼろげなもの。光と影、そのコントラストはまさに白と黒の世界です。

今に生きる黒

黒には、闇、死、恐怖につながるものと黒髪のように美しさにつながるもの、忌避される黒と愛される黒があるようです。さらに現代でいえば、ジグロ、カンダロ、カラス族、ブラック企業：社会常識からはずれ、異質であることを強調するために使われる異端の黒があります。

日本の伝統色には、いくつもの名前が異なる黒があり、日本人の色彩感覚、色の名前を表わす日本語の豊かさを感じます。黒は、古くから日本人の美意識の根本にある色だということを改めて感じますね。

色の質感を 大切にした日本人

かつての日本にとれくらしいの色があったのか。たとえば天然の鉱物からつくる岩絵具は、元々青と緑がなく、色数が増えたのは明治以降。色の原料となるものは、それほど多くはありませんでした。そうした中で日本人は、色以上に、質感を出すことに気を遣っていたということが、絵画や工芸品から見てとれます。それは、墨にもつながっていきます。

墨は黒一色ではありません。中国では昔、「墨には五彩がある」と言われました。五彩とは五色ではなく、無限のことを言います。ただ見た目の黒ではなく、その中に含まれる艶、滲み、マットな感じ、表情も含めて、無限の色が出せると言ったのでしょ。

水墨画の世界でも、一番尊いものは墨だけで描かれたものとされてきました。色を使ってしまうのは、それだけで俗っぽい。黒だけで五彩の世界を感じさせることが一流の作品だと。当然その思想は日本にも流れ、たとえばお城でも、水墨で描かれた山水の部屋が一番ラン



ばい。黒だけで五彩の世界を感じさせることが一流の作品だと。当然その思想は日本にも流れ、たとえばお城でも、水墨で描かれた山水の部屋が一番ラン

自分の黒を追い求めて

中国文人の趣味の世界には「文房四宝」という言葉があります。四つの宝とは何かというと筆、墨、硯、紙。当時、読み書きができるエリート官僚たちにとって、素晴らしい文房四宝を持つことはステータスだったんですね。これは、墨の色を追い求める人たちにとっても、まさに四宝であり、それらの因果関係があって初めて出てくるのが、墨の色なんです。昔の人たちは、感覚的にその因果関係を探り、自分の黒を探していたのだと思います。

最後に、水墨画と言う通り、水が大きい左右します。硬水で墨をするとかなり濃い黒が出ますが、軟水では淡くきれいな黒。反面黒味に強さが欠けるということがあります。それは画風にも影響してくるんです。中国でも、硬水の地域に住んでいる作家の絵は力強いものが多く、軟水地域の作家は柔らかい作品が多い。日本も軟水なので柔らかい水墨画が多いです。

僕も大学院で墨を勉強し始めたとき、

05P
『森羅変転IX』
岩泉 慧
本作品は墨の特性を最大限に引き出すため、支持体が生乾きのうち描き、画宣紙や和紙のような滲みや墨の発色、墨本来の奥深い色味を出すことを狙っている。

*伊藤若冲
江戸時代中期に京で活躍した絵師



良質な画材を取り揃える店内には、希少価値の高い硯が展示されている。

黒をつくる

岩泉 慧
Iwaizumi Kei

画材ラボPIGMENT 所長
画材エキスパート



Profile
いわいずみ けい

京都造形芸術大学 講師、
美術家。2015年に博士号
(芸術)を取得。画材の研究、
指導を行いながら、物質存在
に関する作品制作を行っている。

無限の色をつくる墨

墨は、煤と膠の単純な組み合わせでつくられますが、条件一つで色が変わることも奥深いものです。

その種類には、大きく、油煙墨と松煙墨があり、この二つは煤の採取方法の違いにより、色味が異なります。粒子が細かい油煙墨は赤味を帯び、対して粒子の大きい松煙墨は青みを帯びる。その粒子をコーティングする膠の配合率によっても、コントラストが強くなったり、色の見え方が変わったりします。「古墨がいい」と聞いたことがありますか。それは、長い年月の中で、膠でコーティングされていた粒子に変化が起こり、色に深みが出てくるからです。ワインと同じで、良い寝かせ方をすれば墨に奥深さが出る。そういうことが墨の中で起こるので、さらに墨には、切っても切り離せない道具、硯があります。硯とは墨のためのやすり。ですから同じ墨でも、硯を変えただけでこんなに違うということがあるので。

墨と硯、てはいよいよ描こうかと。紙によっても変わるのが墨の色です。滲むのか、滲まないのか。どういう滲み方をするのか。描く人の筆の運びでも変わってきます。

ものの本質を 浮き上がらせる黒

墨に肩を並べられるのは漆でしょう。漆も塗る人の手によって、いくつもの丁寧な工程をたどり、最後には黒だけと黒以上のものが出てくる。伊藤若冲*は、墨だけでは物足りなくて、最後、鳥の目だけを漆でぼんと描きました。漆に勝る艶の黒はないですからね。日本の黒という、やはり墨と漆、この二つだと思います。

黒は、ある意味で色を認識しなくなる、余計なことにごまかされず、形や、もつと奥深い本質を見ることが出来る色なのかもしれません。たとえばファッションデザイナーの山本耀司さんは、黒で、その質感やシルエットにこだわった。ごまかしのきかない色。それをどう使うかで勝負するところは、水墨画の世界に近いものがあります。

僕の中で黒は、黒だけと黒だと思っていない。無限の色が内包されていると思っています。中国の人たちが言ったように、黒は、すべての色を感じさせることができるはずだと、思っています。